

A 1

極限 $\lim_{x \rightarrow 0} \frac{\cos 3x - \cos 5x}{x^2}$ を求めよ。

【2026 福島大学】

解説 和積公式を用いて、

$$\begin{aligned} \frac{\cos 3x - \cos 5x}{x^2} &= \frac{2 \sin 4x \sin x}{x^2} \\ &= 2 \cdot \frac{\sin 4x}{4x} \cdot 4 \cdot \frac{\sin x}{x} \\ &\rightarrow 2 \cdot 1 \cdot 4 \cdot 1 = 8 \quad (x \rightarrow 0). \end{aligned}$$

参考 (やや煩雑だが) 次のように解くこともできる。

一般に、 $\cos 2\theta = 1 - 2\sin^2 \theta$ より、

$$1 - \cos 2\theta = 2\sin^2 \theta$$

が成り立つことに着目すると、

$$\begin{aligned} \frac{\cos 3x - \cos 5x}{x^2} &= \frac{(1 - \cos 5x) - (1 - \cos 3x)}{x^2} \\ &= \frac{2\sin^2 \frac{5}{2}x - 2\sin^2 \frac{3}{2}x}{x^2} \\ &= 2 \left(\frac{\sin^2 \frac{5}{2}x}{x^2} - \frac{\sin^2 \frac{3}{2}x}{x^2} \right) \\ &= 2 \left\{ \left(\frac{\sin^2 \frac{5}{2}x}{\frac{5}{2}x} \right)^2 \cdot \frac{25}{4} - \left(\frac{\sin^2 \frac{3}{2}x}{\frac{3}{2}x} \right)^2 \cdot \frac{9}{4} \right\} \\ &\rightarrow 2 \left(1^2 \cdot \frac{25}{4} - 1^2 \cdot \frac{9}{4} \right) = 8 \quad (x \rightarrow 0). \end{aligned}$$

A 2

無限級数 $\sum_{n=1}^{\infty} \frac{10 \cdot 7^n - 3 \cdot 2^{3n+1}}{56^n}$ の和を求めよ。

【2026 山形大学】

解説

$$\begin{aligned} \frac{10 \cdot 7^n - 3 \cdot 2^{3n+1}}{56^n} &= 10 \left(\frac{7}{56} \right)^n - 6 \left(\frac{8}{56} \right)^n \\ &= 10 \left(\frac{1}{8} \right)^n - 6 \left(\frac{1}{7} \right)^n \end{aligned}$$

である。ここで、 $\left| \frac{1}{8} \right| < 1$ 、 $\left| \frac{1}{7} \right| < 1$ であるので、2つの無限等比級数について、

$$\begin{aligned} \sum_{n=1}^{\infty} \left(\frac{1}{8} \right)^n &= \frac{\frac{1}{8}}{1 - \frac{1}{8}} = \frac{1}{7}, \\ \sum_{n=1}^{\infty} \left(\frac{1}{7} \right)^n &= \frac{\frac{1}{7}}{1 - \frac{1}{7}} = \frac{1}{6} \end{aligned}$$

が成り立つことから、 $\sum_{n=1}^{\infty} \frac{10 \cdot 7^n - 3 \cdot 2^{3n+1}}{56^n}$ も収束し、その和は

$$10 \cdot \frac{1}{7} - 6 \cdot \frac{1}{6} = \frac{3}{7}.$$

注意 次のような書き方はよくない。

$$\sum_{n=1}^{\infty} \frac{10 \cdot 7^n - 3 \cdot 2^{3n+1}}{56^n} = \sum_{n=1}^{\infty} 10 \left(\frac{1}{8} \right)^n - \sum_{n=1}^{\infty} 6 \left(\frac{1}{7} \right)^n.$$

この等式は、 $\sum_{n=1}^{\infty} 10 \left(\frac{1}{8} \right)^n$ と $\sum_{n=1}^{\infty} 6 \left(\frac{1}{7} \right)^n$ の収束がともに確認した後には正当化できる。ここで用いた議論は「 $\lim_{n \rightarrow \infty} A_n = A$, $\lim_{n \rightarrow \infty} B_n = B$ ならば、 $\lim_{n \rightarrow \infty} (A_n - B_n) = A - B$ が成り立つ」である。 $\lim_{n \rightarrow \infty} (A_n - B_n)$ が収束していたとしても、 $\lim_{n \rightarrow \infty} A_n$, $\lim_{n \rightarrow \infty} B_n$ が収束しているとは限らないことに注意せよ。

A 3

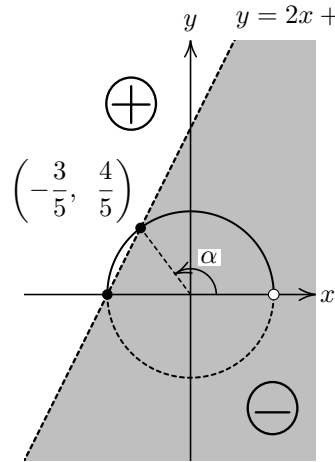
$0 \leq \theta < \pi$ のとき、 $\frac{1 - 4\sin \theta - \cos \theta}{1 + \cos \theta}$ の最小値を求めよ。

【2026 早稲田大学】

解説 $f(\theta) = \frac{1 - 4\sin \theta - \cos \theta}{1 + \cos \theta}$ とおく。

$$\begin{aligned} f'(\theta) &= \frac{(-4\cos \theta + \sin \theta)(1 + \cos \theta) - (1 - 4\sin \theta - \cos \theta)(-\sin \theta)}{(1 + \cos \theta)^2} \\ &= \frac{\sin \theta - 2\cos \theta - 2}{(1 + \cos \theta)^2}. \end{aligned}$$

ここで、 $y - 2x - 2$ の符号は次図のようになる。



α を $0 < \alpha < \pi$, $\cos \alpha = -\frac{3}{5}$, $\sin \alpha = \frac{4}{5}$ を満たす実数とすると、 $f(\theta)$ の $0 \leq \theta < \pi$ の増減は次のようになる。

θ	0	...	α	...	(π)
$f'(\theta)$		-	0	+	
$f(\theta)$		↘	極小	↗	

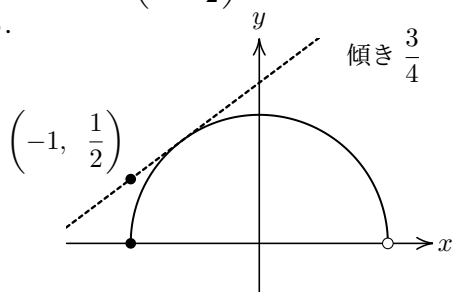
これより、 $f(\theta)$ は $x = \alpha$ のときに最小となり、求める最小値は

$$f(\alpha) = \frac{1 - 4 \cdot \frac{4}{5} - (-\frac{3}{5})}{1 + (-\frac{3}{5})} = -4.$$

注意 本問を数学 IAIB の範疇で解決してみよう. 三角関数の定義を思い出すことで, “図形と方程式” で学んだ知恵を援用して解くことができる. 本問を “図形と方程式” の問題に言い換えると次のようになる.

点 $(\cos \theta, \sin \theta)$ ($0 \leq \theta < \pi$) の軌跡を C とするとき, C と図形 $\frac{1-4y-x}{1+x} = k$ が共有点をもつような実数 k の最小値を求めよ.

$x \neq -1$ において, $\frac{1-4y-x}{1+x} = k$ が表す図形は直線 $1-4y-x = k(1+x)$ すなわち $y = -\frac{k+1}{4}(x+1) + \frac{1}{2}$ であり, これは点 $(-1, \frac{1}{2})$ を通る傾きが $-\frac{k+1}{4}$ の直線である.



傾き m で点 $(-1, \frac{1}{2})$ を通る直線 $y = m(x+1) + \frac{1}{2}$ が単位円と接する条件は

$$\frac{|2m+1|}{\sqrt{4m^2+4}} = 1.$$

$$4m^2 + 4 = 4m^2 + 4m + 1.$$

$$m = \frac{3}{4}.$$

したがって, 傾き $-\frac{k+1}{4}$ のとり得る値の範囲は

$$-\infty < -\frac{k+1}{4} \leq \frac{3}{4}.$$

$$\therefore -4 \leq k < +\infty.$$

ゆえに, 求める最小値は

$$-4.$$

A 4

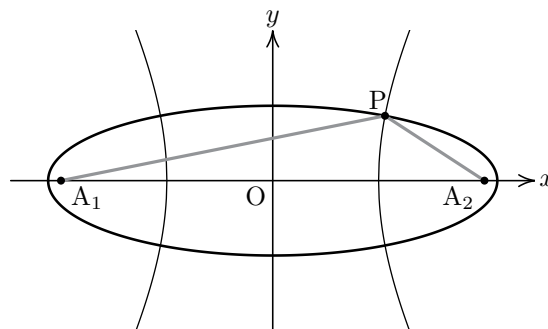
楕円 $C_1: \frac{x^2}{9} + y^2 = 1$ と双曲線 $C_2: \frac{x^2}{2} - \frac{y^2}{6} = 1$ を考え, C_1 の焦点を x 座標が小さい順に A_1, A_2 とし, C_1 と C_2 の交点のうち第 1 象限にあるものを P とする. C_2 の焦点も A_1, A_2 であることを示し, 線分 A_1P と A_2P の長さを求めよ. さらに, $\cos \angle A_1PA_2$ の値を求めよ. 【2026 滋賀県立大学】

解説 楕円 C_1 の 2 焦点は $(\pm\sqrt{9-1}, 0)$ すなわち $(\pm 2\sqrt{2}, 0)$ であり,

$$A_1(-2\sqrt{2}, 0), \quad A_2(2\sqrt{2}, 0).$$

一方, 双曲線 C_2 の 2 焦点は $(\pm\sqrt{2+6}, 0)$ すなわち $(\pm 2\sqrt{2}, 0)$ であり, C_2 の 2 焦点も A_1, A_2 である.

(証明終り)



P が楕円 C_1 上にあることから,

$$A_1P + A_2P = (\text{長軸の長さ}) = 2 \times 3 = 6 \quad \dots \textcircled{1}$$

を満たし, $A_1P > A_2P$ であり, P が双曲線 C_2 上にあることから,

$$A_1P - A_2P = (\text{頂点間距離}) = 2 \times \sqrt{2} = 2\sqrt{2} \quad \dots \textcircled{2}$$

を満たす. ①, ② により,

$$A_1P = 3 + \sqrt{2}, \quad A_2P = 3 - \sqrt{2}.$$

三角形 A_1PA_2 で余弦定理を用いると,

$$A_1A_2^2 = A_1P^2 + A_2P^2 - 2 \cdot A_1P \cdot A_2P \cos \angle A_1PA_2$$

より,

$$\cos \angle A_1PA_2 = \frac{(3 + \sqrt{2})^2 + (3 - \sqrt{2})^2 - (4\sqrt{2})^2}{2(3 + \sqrt{2})(3 - \sqrt{2})} = -\frac{5}{7}.$$

参考 共焦 2 次曲線に関する話題は本編の p.134 にもある. 本問は本編 p.124(2016 年大阪府立大) の数値変えであり, 楕円の定義 ①) と双曲線の定義 ②) から “和差算” として解く有名問題である. 交点 P の座標を C_1 の式と C_2 の式を連立して計算すると $P(\frac{3}{2}, \frac{\sqrt{3}}{2})$ と求まり, 2 点間距離として, A_1P, A_2P を求めることももちろん可能であるが, 解答のように解くのがスマートであろう.

A 5

$$\int_0^{\frac{\pi}{6}} \frac{\sin x \cos x}{\left(\sin^2 x + \frac{1}{2}\right)^2} dx \text{ の値を求めよ.}$$

【2026 藤田医科大学】

解説 $\sin^2 x + \frac{1}{2} = t$ とおくと, $2 \sin x \cos x dx = dt$ であり, $x: 0 \rightarrow \frac{\pi}{6}$ のとき, $t: \frac{1}{2} \rightarrow \frac{3}{4}$ であるから,

$$\begin{aligned} \int_0^{\frac{\pi}{6}} \frac{\sin x \cos x}{\left(\sin^2 x + \frac{1}{2}\right)^2} dx &= \int_{\frac{1}{2}}^{\frac{3}{4}} \frac{1}{2t^2} dt = \frac{1}{2} \left[-\frac{1}{t} \right]_{\frac{1}{2}}^{\frac{3}{4}} \\ &= \frac{1}{2} \left(2 - \frac{4}{3} \right) = \frac{1}{3}. \end{aligned}$$

注意 本質的には上の計算と同じであるが, 置換積分を行わず, 直接計算すると次のようになる.

$$\begin{aligned} \int_0^{\frac{\pi}{6}} \frac{\sin x \cos x}{\left(\sin^2 x + \frac{1}{2}\right)^2} dx &= \left[-\frac{1}{2\left(\sin^2 x + \frac{1}{2}\right)} \right]_0^{\frac{\pi}{6}} \\ &= \frac{1}{2} \left(2 - \frac{4}{3} \right) = \frac{1}{3}. \end{aligned}$$

A 6

複素数平面上の点 z が不等式 $|z + \bar{z}| + |z - \bar{z}| \leq 2$ を満たすとき, 点 z の全体はどのような図形を表すか. $z = x + yi$ (x, y は実数) において答えよ. また, このとき $|z - 1 - i|$ の最大値と最小値, およびそのときの z の値をそれぞれ求めよ.

【2026 長崎大学】

解説 $z = x + yi$ (x, y は実数) とおくと, $\bar{z} = x - yi$ であり,

$$z + \bar{z} = 2x, \quad z - \bar{z} = 2yi$$

であるから, 条件 $|z + \bar{z}| + |z - \bar{z}| \leq 2$ は

$$|2x| + |2yi| \leq 2$$

すなわち

$$2|x| + 2|y| \underbrace{|i|}_1 \leq 2$$

すなわち

$$|x| + |y| \leq 1 \quad \dots (*)$$

となる. xy 平面上で (*) の表す領域を D とする.

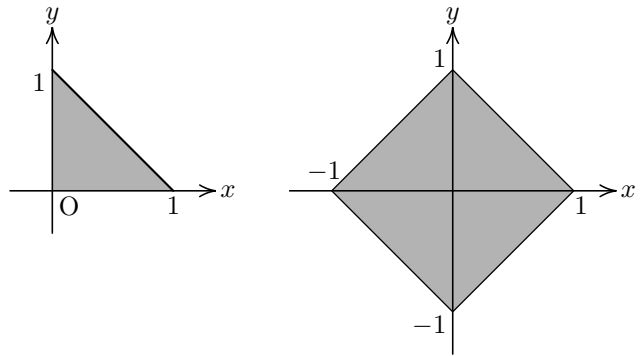
$$|-x| = |x| \text{ により, } D \text{ は } y \text{ 軸対称であり,}$$

$$|-y| = |y| \text{ により, } D \text{ は } x \text{ 軸対称である.}$$

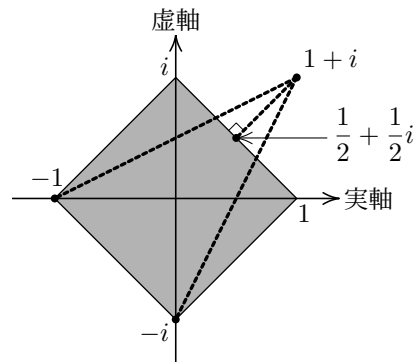
$x \geq 0, y \geq 0$ においては (*) は

$$x + y \leq 1$$

となり, 図示すると次の左図のようになり, D は右図のようになる.



$|z - 1 - i| = |z - (1 + i)|$ は点 z と点 $1 + i$ との距離を表しており, 点 z が領域 D を動くとき, この距離が最大となるのは, z が $-1, -i$ のときであり, 最小となるのは, z が $\frac{1}{2} + \frac{1}{2}i$ のときである.



したがって, $|z - 1 - i|$ の

$$\text{最大値は } \sqrt{5} \quad (z = -1, -i),$$

$$\text{最小値は } \frac{\sqrt{2}}{2} \quad \left(z = \frac{1}{2} + \frac{1}{2}i \right).$$

参考 一般に, 点 (a, b) と点 (c, d) の「 l_1 距離」というものは

$$|a - c| + |b - d|$$

で定められる. 京都のような格子状の道で座標軸に沿って移動する (斜めにはいけない) 場合, (a, b) から点 (c, d) への移動距離は l_1 距離になる. これに対し, 2 点間をまっすぐ結んだ線分の距離

$$\sqrt{(a - c)^2 + (b - d)^2}$$

は l_2 距離 (あるいはユークリッド距離) と呼ばれる. (*) の左辺は原点と点 (x, y) との l_1 距離を表している. D の境界になっている正方形は原点からの l_1 距離が 1 で一定である点の集合ということになり, 正方形が l_1 距離での単位円になっていることを示している (円は丸のことではない!).

A 7

媒介変数 t を用いて

$$\begin{cases} x = e^{-t}(\cos t + \sin t), \\ y = e^{-t}(\cos t - \sin t + 2) \end{cases} \quad (0 \leq t \leq \pi)$$

と表される曲線の長さを求めよ。 【2026 三重大学】

解説

$$\begin{aligned} x' &= -e^{-t}(\cos t + \sin t) + e^{-t}(-\sin t + \cos t) \\ &= -2e^{-t} \sin t, \\ y' &= -e^{-t}(\cos t - \sin t + 2) + e^{-t}(-\sin t - \cos t) \\ &= -2e^{-t}(\cos t + 1) \end{aligned}$$

であるから、

$$\begin{aligned} (x')^2 + (y')^2 &= 4e^{-2t} \{ \sin^2 t + (\cos t + 1)^2 \} \\ &= 4e^{-2t} \underbrace{(\sin^2 t + \cos^2 t + 2 \cos t + 1)}_1 \\ &= 8e^{-2t} \underbrace{(1 + \cos t)}_{2 \cos^2 \frac{t}{2}} = 16e^{-2t} \cos^2 \frac{t}{2}. \end{aligned}$$

よって、

$$\sqrt{(x')^2 + (y')^2} = 4e^{-t} \left| \cos \frac{t}{2} \right|.$$

これより、求める長さは

$$\begin{aligned} \int_0^\pi \sqrt{(x')^2 + (y')^2} dt &= \int_0^\pi 4e^{-t} \left| \cos \frac{t}{2} \right| dt \\ &= 4 \int_0^\pi e^{-t} \cos \frac{t}{2} dt. \end{aligned}$$

ここで、 $I = \int_0^\pi e^{-t} \cos \frac{t}{2} dt$ とおき、部分積分を2回施すと、

$$\begin{aligned} I &= \left[\frac{e^{-t}}{-1} \cdot \cos \frac{t}{2} - e^{-t} \cdot \left(-\frac{1}{2} \sin \frac{t}{2} \right) \right]_0^\pi + \int_0^\pi e^{-t} \cdot \left(-\frac{1}{4} \cos \frac{t}{2} \right) dt \\ &= \frac{e^{-\pi}}{2} + 1 - \frac{1}{4} I \end{aligned}$$

より、

$$\begin{aligned} \frac{5}{4} I &= \frac{e^{-\pi}}{2} + 1. \\ \therefore I &= \frac{2(e^{-\pi} + 2)}{5}. \end{aligned}$$

したがって、求める長さは

$$4I = \frac{8(e^{-\pi} + 2)}{5}.$$

注意 部分積分の反復適用については、本編の p.138 を参照せよ。ちなみに、部分積分の反復適用は、『解析学 微

積分編』(土倉保 著) では p.84 で「 n 次の部分積分公式」という名前で紹介されている。本編の p.141 で注意したように、(指数関数)×(三角関数) の形を部分積分する際には、三角関数を微分側に回した方が良いが、逆にしても当然正しい値は求められる。その計算を掲載しておく。

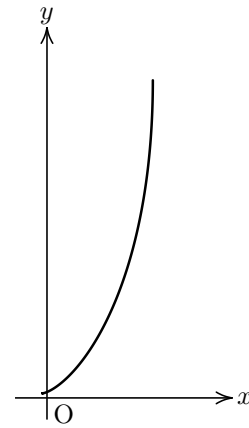
$$\begin{aligned} I &= \int_0^\pi e^{-t} \cos \frac{t}{2} dt \\ &= \left[e^{-t} \cdot 2 \sin \frac{t}{2} - (-e^{-t}) \cdot \left(-4 \cos \frac{t}{2} \right) \right]_0^\pi + \int_0^\pi e^{-t} \cdot \left(-4 \cos \frac{t}{2} \right) dt \\ &= 2e^{-\pi} + 4 - 4I \end{aligned}$$

より、

$$5I = 2(e^{-\pi} + 2).$$

$$\therefore I = \frac{2(e^{-\pi} + 2)}{5}.$$

参考 本問の曲線を図示すると次のようになる。



Coffee Break

3つの正の実数 a, b, c に対して、

$$\underbrace{\frac{a+b+c}{3}}_{\text{相加平均}} \geq \underbrace{\sqrt[3]{abc}}_{\text{相乗平均}}$$

が成り立つ。また、等号が成り立つのは $a = b = c$ の場合に限る。これを次の問題に利用してみよう。

問題

$$f(x) = x^2 + \frac{16}{x} \quad (x > 0) \text{ の最小値を求めよ。}$$

$\frac{16}{x}$ を $\frac{8}{x} + \frac{8}{x}$ と真つ二つに分割し、

$$f(x) = x^2 + \frac{8}{x} + \frac{8}{x} \geq 3 \sqrt[3]{x^2 \cdot \frac{8}{x} \cdot \frac{8}{x}} = 12$$

の成立がいえ、さらに、 $f(2) = 12$ であることから、

$$f(x) \text{ の最小値は } 2$$

であることがいえる。